

平成 23 年度東海・北陸地区国立大学法人等 技術職員合同研修(複合領域コース)

第二技術室 安藤誠、第一技術室 ○古屋岳

はじめに

国立大学協会および東海北陸地区国立大学法人等の主催で「平成 23 年度東海・北陸地区国立大学法人等技術職員合同研修」が 11 月 9 日(水)から 11 月 11 日(金)の日程で岐阜県土岐市の核融合科学研究所において開催され、本研修に参加しましたので報告いたします。

目的

東海・北陸地区の国立大学法人等に所属する技術職員に対し、その職務遂行に必要な一般的知識、専門的知識及び技術等を習得させ、技術職員としての資質の向上を図るとともに職員相互の交流に寄与する事を目的としており、東海北陸地区の大学・高専より 32 名の技術系職員が参加した。

研修内容

1 日目

開講式・記念撮影

講義 1 「核融合科学研究所の安全管理について」関哲夫准教授

核融合科学研究所における安全衛生管理体制や巡視の実施状況、危険回避に向けた取り組みについて講演があった。講義で配布された核融合科学研究所の安全衛生管理に関する計画表からは教職員や学生に向けた講習や職員の資格取得を積極的に進めている事がうかがえた。

講義 2 「安全・快適に働くための法ルール」朝倉大和教授

労働基準法や労働契約、労働条件など労働に関する基本的なルールについて講演があった。

プレゼンテーション

すべての参加者より現在の職務内容に関するプレゼンテーションが行われた。本研修は複合領域の研修であったため、様々な分野の技術系職員が参加しており、機械系から農業系まで多岐にわたる職員が参加しており、興味深い話を聞くことができた。

核融合科学研究所の施設見学

核融合科学研究所の施設見学では実験室の通路や配電盤の前など物を置いてはいけない区画がペンキやテープで明示されていた。この手法は常駐者のみではなく外部から来た人間に対しても容易に区画分けが理解でき、実

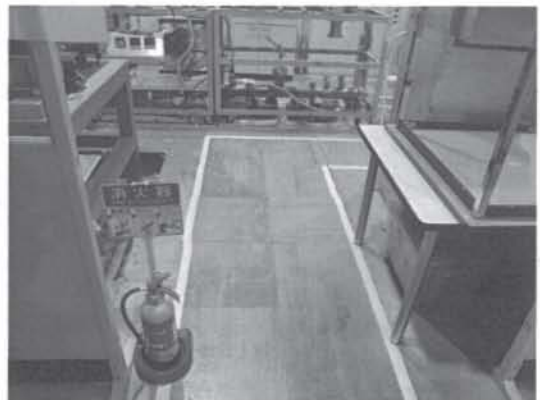


図 1 核融合科学研究所通路表示

験室の安全確保に有効であると共にコスト等の負担が小さいことから福井大学でも導入が可能な手法であると感じた。

2日目～3日目

中部安全衛生サービスセンターより講師を招き、危険予知トレーニング(KYT)を行った。

講義「ゼロ災運動の目指すもの」

ゼロ災運の基本理念などの講義が行われた。近年の全国安全週間のスローガンは結果的なゼロ災ではなく、危険ゼロを目指す運動へと変わってきた。これには事業主の取組に加え個人の危険に対する認識を高めることが必要であり、危険予知トレーニングなどの普段からの取り組みが大切であるとのことであった。

実技：指差し呼称、健康問いかけ KYT、KYT

初めに指差し呼称による注意力の向上や意識レベルの切り替え効果について学んだ。その後、部下に対する健康管理の手法である健康問いかけ KYT を行った。普段から健康問いかけを行うことで部下とのコミュニケーションの向上が期待できると共に部下の異変に対し敏感になれるとのことであった。

実技は5から6名を1グループとしてグループ単位で行われた。KYTは4ラウンド(4R)で構成され各ラウンドは1R 危険項目の洗い出し、2R 危険度または発生頻度が高いと思われる項目の絞り込み、3R 絞り込んだ危険に対する対策の列举、4R 対策の絞り込みおよび目標設定その後、チーム構成員で危険の内容から対策、目標までを指差しながら唱和する指差し唱和により締めくくる。KYTはチームを構成するすべての人が作業に潜む危険を認識することが必要であるため、特に1Rの危険の洗い出しにおいては第三者が理解できるよう具体的に、事故を引き起こす危険な要因と現象で表現し、またチーム構成員全員が発言することにより参加意識を持つ事が大切である。今回の研修では最も基本的なKYT基礎4R法から1人KYT短時間KYT等様々な種類の危険予知トレーニングを体験することができた。



図2 指差し唱和

まとめ

本研修では中部安全衛生サービスセンターの方を講師に招き、複数人から1人まで様々な人数で行う危険予知トレーニングについて研修を行った。特にワンポイントKYTは所要時間が10分程度であることから、朝礼時などに行うことが可能な実践的な手法であった。また、KYT4R法を応用した問題解決4R法では日常的問題点を洗い出し、解決するために有効な手法であった。研修を通して危険認識の共有には否定的な表現(例：保護メガネをしていない)ではなく肯定的な表現(例：裸眼で〇〇をしている)を用いて議論することの有効性を認識した。